



TITLE:

出口勇蔵先生を偲んで

AUTHOR(S):

岸田, 理

CITATION:

岸田, 理. 出口勇蔵先生を偲んで. 経済論叢 2003, 172(3): 96-97

ISSUE DATE:

2003-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/45585>

RIGHT:

經濟論叢

第 172 卷 第 3 号

哀 辞

故 出口勇藏名誉教授遺影および略歴

白杉庄一郎のアダム・スミス研究……………	田 中 秀 夫	1
金融工学とコーポレートファイナンス（2）……	鈴 木 輝 好	22
「マルクス・モデル」の諸性質と 生産要素としての労働の本性……………	山 下 裕 歩 大 西 歩 広	38
組織論における制度学派の理論構造……………	櫻 田 貴 道	54
地下水保全税の制度設計（1）……………	川 勝 健 志	70

追 憶 文

出口先生と河上肇……………	杉 原 四 郎	91
出口勇藏先生を偲んで……………	岸 田 理	96
晩年の出口勇藏先生……………	柴 田 周 二	98

平成15年 9 月

京 都 大 學 經 濟 學 會

〔京都大学経済学会役員〕 (五十音順)

評議員長 評議員	下赤依稲今久	谷岡田葉保城本田仁西田總谷島澤島出邊地本松山尾澤木中	政高久幸秀武和宏	弘功典子生樹和弘幸広弘行弥明文孝健生洋朗尋生夫丈詔夫		德中中成西西根日曳久藤古堀松文本森諸八山	賀島野生田村井置野本井川井山棟富木本喜田林林	芳康一達祐周雅弘憲秀和啓世美公紀裕一和直靖	弘彦新彦二三弘郎孝夫樹顯生之一彦夫徹郎美洋男樹永
(学会委員)					(学会委員)				
(学会委員)					(監査委員)				
(監査委員)									
(学会委員会) 副主任					(学会委員)				
					(学会委員会) 主任				

——既刊目次——

第172巻 第2号

韓国と中国の輸出主導型成長 (2)	宇梁	仁峻	宏豪	幸磊
女性の就業形態と出産期の選択	坂爪	聡子		
エージェンシー・コストと資本構成、 設備投資の関係 (2)	郭麗	虹		
開放的所有構造下における経営者支配の根拠 (2)	坂本	雅則		
銀行の貸し渋りにおける不良債権の影響	玄	錫元		

哀 辞

平成15年4月2日 本学名誉教授出口勇蔵先生が逝去されました
享年94歳

先生は 昭和8年京都帝国大学経済学部を卒業 大学院で経済思想史を学ばれた後 助手 講師 助教授を経て 昭和23年教授に就任 経済学第二講座を担当されました 先生のご専門は経済学史でありましたが 経済哲学と社会思想史にも造詣が深く チェルゴやコンドルセを中心とするフランス啓蒙の経済思想・進歩思想の研究『経済学と歴史意識』（昭和18年）は 版を重ねた名著として知られていますそして 戦後の大塚史学・大塚ウェーバーに対抗して行われたウェーバーの方法論の研究 トーニーの『宗教と資本主義の興隆』の翻訳と紹介は今もなお顧みられる意義を持っております さらに歴史学派とメーザーやヘルニクなどのロマン派の研究 アダム・スミス研究など 先生の研究は フランス ドイツ オーストリア イギリス 中国等の近代思想の全般に及ぶ広大かつ深遠なもので それはわが国の経済学史・社会思想史の研究に対する大きな貢献であります 先生は 経済学史学会を中心として学会活動も積極的に担われ 日本学術会議会員（昭和32年から35年） 経済学史学会代表幹事（昭和43年から47年）として わが国の学術の振興と発展に尽力されました

また先生は 評議員（昭和27年から29年 43年）と学部長（昭和32年から33年 昭和42年から43年）などの職務を通じて京都大学の発展に貢献されるとともに 教育においても多くの学生・大学院生を育成されました 昭和47年停年により退官され 京都大学名誉教授の称号を受けられましたが なお退官後も 名城大学教授 京都薬科大学教授を務められました

京都大学経済学会は 先生の生前における経済学研究と教育に対するご貢献に感謝するとともに ここに生前の先生の肖像を掲げて心から哀悼の意を表します

平成15年9月

京都大学経済学会

故 出口勇藏先生 御略歴

1909(明治42)年 1 月	京都市に生まれる
1933(昭和 8)年 3 月	京都帝国大学経済学部卒業
1933(昭和 8)年 4 月	京都帝国大学大学院入学
1933(昭和 8)年 5 月	京都帝国大学経済学部副手
1938(昭和13)年 3 月	京都帝国大学助手
1939(昭和14)年 3 月	京都帝国大学経済学部講師
1946(昭和21)年 3 月	京都帝国大学助教授，経済学部勤務
1946(昭和21)年10月	人文科学研究所兼務
1948(昭和23)年 6 月	京都大学教授，経済学部勤務，経済学第二講座担任
1952(昭和27)年 7 月	京都大学評議員
1952(昭和27)年10月	経済学博士
1957(昭和32)年 1 月	京都大学経済学部長，日本学術会議会員（第 4 期）
1958(昭和33)年 3 月	教養部併任
1960(昭和35)年 8 月	連合王国，ドイツ連邦共和国，スペインへ出張
1967(昭和42)年 1 月	京都大学経済学部長
1968(昭和43)年 3 月	京都大学評議員，教養部併任
1968(昭和43)年11月	経済学史学会代表幹事
1972(昭和47)年 4 月	京都大学教授停年退官，京都大学名誉教授，名城大学教授
1977(昭和52)年 4 月	京都薬科大学教授
1985(昭和60)年 3 月	京都薬科大学教授退職
2003(平成15)年 4 月	逝去

〈追憶文〉

出口先生と河上肇

杉 原 四 郎

I

私が京大経済学部に学生と助手として在籍していた1939-47年に、出口先生は専任講師で、原書購読を担当しておられた。私がえらんだ英書や独書のいずれも他の先生が担当されたので、私は先生の講義を受ける機会はなかったが、当時『経済論叢』に発表されていた論文や最初の著書『経済学と歴史意識』（1943年）を読んでいたので、先生にはずっと親近感をもちつづけていた。京大をやめてからも、経済学史学会やスミスの会でおつき合いができ、御一緒に仕事をする機会もあった（『京大史記』（1988年）や学史学会の『三十年史』のことなど）ので、いろいろのことが思い出される。

私の記憶にとくにつよくのこっている先生の論文はつぎの二つである。

「ブルジョア経済学の俗流化と民族の問題——カール・クニースにおける民族の問題の序論——」『経済論叢』第71巻第2号，1953年2月。

「河上肇における二種類の真理——『貧乏物語』の分析——」『経済論叢』第90巻第3号，1962年9月。

前者は、『経済学と歴史意識』で解明した俗流経済学的ミルの方法論では民族の問題がその経済学の「問題領域の中に積極的にはいることなしに終わった」こと、またミルの自由論に関しても、彼の説く自由はイギリス・ブルジョアジーの自由であって、「プロレタリアートや植民地人民については妥当性をもちえない」として、ミルの俗流性をといている。又後者は、思想家河上肇を論ずる場合とりあげざるを得ない『貧乏物語』の問題性を科学的真理と宗教的真理の関係にからませつつ論じたものである。ミルと河上とに関心をもつ私にとってはいずれも熟読に値する貴重な論文であるが、ここでは後者にかぎって若干のコメントを加えるにとどめたいと思う。

II

著者は河上肇を論じたこの論文の一で、河上にとって科学のおよび宗教的という二種の真理は、外界の物と内界の心という「互に恪守すべき截然たる領域にかかわる」と規定されているとのべ、この二種をめぐる問題が河上の思想的発展の当初から（具体的には1905年から）彼にとって根本的なものであるから、これを中心に河上の一生を省みることは、河上研究の基本的テーマの一つになるという。そしてその一節として彼の思想的第一期の名著『貧乏物語』をとりあげ、河上のこの問題を提出する仕方や解決への努力を究明しようというのが本論文であるという。

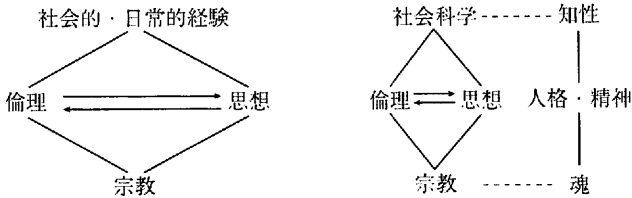
論文の二で、河上はスミスの『道徳感情論』の一節と間宮英宗の禅話の一節を引き、この二つの思想には同じもの、つまり宗教的な心境で裏打ちされている人生観があるという点で共通していると考えるのだが、著者によればこの共通点は宗教でなく思想または倫理としてとり上げると相異点が明確になる。スミスの場合近代市民社会と近代的な歴史意識が明瞭になっているのに間宮の場合には社会的・歴史的意識が欠如している。この相違を明らかにしないまま宗教にかかわる問題を提出していることが『『貧乏物語』の結論に重要な問題をはらませることになる』と著者は指摘している。

論文の三で、河上は『貧乏物語』の連載に際し、上篇・中篇を終えて貧乏対策を論ずる下篇に入る前に三週間も長く中断して、「今やようやく筆を執るといえども、驚馬に鞭ちて峻坂を登るが如し」と告白し、貧乏退治の根本策三種をのべるに際しても「河上の筆は重く、文章にも渋滞のあとがみえる」と指摘している。

河上が三種の政策をあげながら結局（一）の贅沢の廃止ということに主眼をおくにいったのは、そしてそのことに経済学者河上は自から不満を覚えざるを得なかったのは、「彼が『生産力』については、その近代性についての意識が明瞭であったけれども、生産関係については、その意識が必ずしも十分にあったとはいえない」。それでマルクスの唯物史観の公式も河上によって翻訳されるのだが、マルクスに似た思想が古く東洋にもあると語って、儒教の倫理思想とのすりかえが行われるのだと著者はいう。そして問題を経験科学としての経済学における科学的真理と宗教的真理との関係についての原理的な考察（論文の四 経済〔社会的経験〕と思想・倫理・宗教）へうつすのである。

III

宗教と経済（社会的経験）とは直接には結びつかず、その媒介の役を果たすのは倫理と思想である。そのうち倫理（エートス）が思想より強力に媒介の役を果たすと著者はい、つぎの二つの表をかかげている。そしてそれに基づいて『貧乏物語』における二種の真理のあり方を検討する。



この検討の結果としてつぎの二つの点が提示される。第一、河上は科学と宗教の間に存在する倫理や思想の次元に正統な位置をあたえていない。それは東洋の文化では宗教と倫理が未分化のままの状態であり、かつ経験科学が独立しなかったため、科学と思想とがつねに混在しているからである。河上の場合科学と宗教とが直接結びつけられることになるが、「この事態は晩年においてもかわるところはなかった」。第二、倫理と思想との関係について東洋と西洋とを対比すると、西洋では思想は知性の産物だから「進歩を典型的なかたちでとげるのに対し、倫理は情感に傾き易いから停滞・硬化の傾向が強く、東洋では両者のバランスが失われ易く、それを快復しようとする実践的努力が不足する。東洋または日本では個人の内部で「伝統的倫理と進歩的な思想が奇妙な形で混在することがある」。われわれは図で示した思想と倫理との相互浸透をはかって、「エートスに新しい知性を盛り、思想には感覚的な内容をゆたかにして日常生活のなかにとけこまず道を講ずること」を心がけなくてはならない。

IV

『貧乏物語』は出版後多くの読者に迎えられ、学生や一般人に経済問題と経済学という学問との重要性に眼を開かせることになったが、学界でもノンマルクス派からは好意的、マルクス派からは批判的な評価をうけた。科学的真理と宗教的真理の問題は戦後の河上研究でとりあげられることが多くなり、マルクス主義者としての河上の思想的独白

性として注目されてきた。そうした従来の河上研究の中で、この出口論文は『貧乏物語』の問題点をほりさげて「二種の真理」の問題にたどりつき、それを経済学一般の根本問題に移して東西思想の比較考察で吟味したうえで、最後に河上を含む日本人（とくに知識人）の生き方をとりあげるといふ、独特な構成をとったユニークな論文である。

出口先生によれば、この論文は、1962年6月3日に京大の第一教室において河上祭主催でひらかれた講演の趣旨を「少しくわしく書きつづったものである」。これはその後末川博編『河上肇研究』（筑摩書房、1965年）に収録されるとともに、Two Kinds of Truth conceived by Hajime Kawakami—An Analysis of “A Story of Poverty”—として『京大欧文紀要』（第32巻第2号、1962年10月）にも発表された。先生がこの論文を書かれた特別の思いがしのばれるが、私はこれを熟読しつつつぎの二つの感想を持った。

(1) 京都大学経済学部は経済学部のカリキュラムの中に経済哲学を設け、恒藤恭が担当したが、私の学生時代には田辺元先生の（名前は哲学概論だったが内容は法経の学生向きの講義だった）担当であった。戦後は梯明秀先生が非常勤で講義され、一時出口先生自身が担当されたこともあったように思う。河上が京大の社会科学研究会を指導していた時、経済学批判会をつくって三木清をチャーターとして『ドイツ・イデオロギー』を勉強したという伝統が、戦後の経済学部にも流れていたであろう。出口先生は下村・服部編『哲学研究体系』に「経済哲学」を執筆しておられるが、先生の「経済哲学」の講義（や著述）にはこの河上における二種の真理の問題はとりあげられているのだろうか。

(2) 先生は英・独・仏の経済思想を研究、また1947年以降経済学史の講義を担当され、1953年に『経済学史』を編集・出版されたが、研究の中心は西欧の経済思想であった。しかし1941年以来京大人文科学研究所に関係されるようになってから中国の経済思想の研究にも従事されるようになり、1941年以来『経済論叢』や『東亜経済論叢』にその関係論文を発表されはじめる。そして『孫文の経済思想』を1946年に高桐書院から公刊された。こうした先生のアジア研究がその後、経済学史や社会思想史の研究に、とくにウェーバー研究や方法論研究の上でどのような影響を及ぼしたのであろうか。

(3) 先生は1960年代以後、経済学史の現代的意義についての諸論文を発表しておられる。河上肇以来の京大経済学部の学史・思想史研究の伝統をひきつぎ、それをさらに発展させてゆきたいと思っている私達にとって、先生の全集または著作集が編まれたらその意義が大きいであろうと、行澤健三ら編『社会科学の方法と歴史』（1978年）におさめら

れた先生の略歴と著作目録をよんで、その思いを深くするのである。

出口勇蔵先生を偲んで

岸 田 理

私が学部学生のころ出口勇蔵先生のことを初めて知ったのは、ミネルヴァ書房発行（1953年）の編著『経済学史』を通してである。この書物は出口先生が編集されたもので、執筆者のなかには内田義彦・白杉庄一郎・河野健二教授といった著名な方々もその名を連ねていた。とりわけ私が最も感銘を受けた叙述箇所は、出口先生自らが執筆された第一章「経済学史とは何か」という箇所である。この章は「経済学史の研究の意義」、「経済学史の研究課題」と、さらに「経済学史の研究手法」の三つの節から構成され、いわゆる経済学方法論がくわしく展開されている。それまでは経済学固有の領域のものばかりを見慣れていた私にとって、哲学的考察をふまえた第一章の方法論叙述がまことに新奇なものに見え、あたかも哲学の講義を聞かされているようであった。まさしく経済哲学への開眼である。

このことが契機となって、私はいよいよ卒業しようとする段階に至って大学院への進学を志し、出口勇蔵教授の門を敲いたのである。講義以外に全く面識のなかった私に対して、先生は快く応待していただき、私の意のあるところを十分に聞いてくださった。当時、旧制の大学院は指導教授の許可があれば入学できたのである。数日後あらためて面会し、正式の許可をいただいた。1954年春のことである。

私が大学院に入学した当時、新制と旧制とから成る大学院ゼミが開かれていた。それには出口研究室の先輩たちも加わっていた。テキストはR. H. トーニーの『宗教と資本主義の興隆』（R. H. Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism. A Historical Study*, 1926）であった。私は途中から参加したので事情は知らないが、M. ウェーバー研究の一環として、そのテキストが取り上げられたのであろう。後にこれは出口先生と越智武臣氏の共訳という形で岩波文庫二巻本として出版されることになった（上巻1956年、下巻1959年）。

以上が大学院入学前後の私の行動の軌跡であるが、今から思えばいかに病後であったとは言え、あまりにも直線的な行動であったことを反省させられるとともに、その行動

を受け入れていただいた出口先生の寛容さにあらためて感謝する次第である。

さらに、当時の出口研究室には次のような先輩がいられた。行沢健三・田中真晴・平井俊彦・山口和男・永岡薫といった方々である。その方々の研究テーマはさまざまで決して一方に偏することなく、ひたすらわが道を歩んでいられた。これが自由を尊ぶ出口研究室の伝統でもあったろうか。私自身もテーマ選びについては紆余曲折を経て、イギリス歴史派経済学、なかんずくウォルター・バジョット (Walter Bagehot, 1826-1877) の研究に辿りついたのである。もちろんその際、出口先生より貴重な示唆をいただいたことは言うまでもない。

1956年、わたしは出口先生のご推薦を得て名古屋の愛知学院大学商学部に勤めることになった。そのため京都まで少々遠くはなったが、出口研究室が主宰する研究会にはできるだけ出席するように努めていた。

さらに、1966年、研究上の便を考えて龍谷大学経済学部へ移ることになったが、実際には学校行政に多大の時間を取られ、役職の合間合間に時間を見つけては論文をまとめるというような日々を過ごしていた。そのような折に出口先生宅をお訪ねした時、先生から私が学校の要職にあることを一方では喜んでいただいたものの、他方ではまだ私自身の著書が公刊されていない点を非常に残念がられた。その度ごとに恐縮して退出するという有様であったが、1979年によく拙著『ウォルター・バジョットの研究——経済思想および経済理論を中心として——』（ミネルヴァ書房）が出版された時は、殊のほか喜んでいただいた。私自身も自著の「はしがき」のなかで十分な謝辞を述べたつもりであるが、ようやくご恩返しできた思いで一杯であった。

以上、出口勇蔵先生を偲びながら私にとって印象ぶかったことを取りあげてみたが、先生との付き合いは極めて長い。1954年から最近（2003年）までだからカレコレ50年になる。学問上のことだけでなく趣味に至るまで、全人的なお付き合いをさせていただいた。さらに、家族ぐるみのお付き合いもさせていただいた。先生とはそういう方である。表面的なお付き合いを極端に嫌い、「好き」と「嫌い」がはっきりしてられる。晩年にはその傾向がより鮮明になっていたように思われる。最後の最後までお付き合いをいただいた先生は、私にとってはかけがえのない先生であった。

去る4月初旬、お嬢様から先生の訃報が伝えられた。全く安らかな最期であったようである。心よりご冥福をお祈りする次第である。

晩年の出口勇蔵先生

——ウェーバーとクニースをめぐる——

柴 田 周 二

京都鹿ヶ谷の法然院には、河上肇の墓碑があり、そこには、「多度利津伎布理加幣里美禮者山河遠古依天波越而來都流毛野哉（辿りつき振り返りみれば山河を越えては越えて来つるものかな）」という河上の歌が刻まれている。そして、その東隣には、石や碑文の選定に努力され、河上肇とは師弟関係にあり、かつ出口先生の恩師でもあった石川興二の墓が寄り添うように建っている。1970 年春、京都大学における出口ゼミの最後の卒業生である私たちの授業は、河上肇の墓参から始まった。この年のゼミのテキストに選ばれたのは、『世界の大思想23 ウェーバー 政治・社会論集』（河出書房新社）であり、年の前半はそれを輪読し、後半は各自が自由なテーマで発表するというものであった。先生の関心からは少し遠くみえるテーマのときは、先生は学生の発表を聞きながら、眠られているというほほえましい光景もあった。

出口先生というと、まず頭に浮かぶのは、「ウェーバー」や「経済学史」という言葉である。しかし、先生の学問の出発点は、恩師の強い影響の下に、ディルタイ、クニース、フィヒテなどの研究にあり、ヘーゲルや西田哲学にも深い造詣があった。先生の退官記念講演会は、京都大学の楽友会館で行われ、その時、先生が白らの思想的遍歴を語られた中で、若いころに影響を受けた明治時代の宗教思想家である「清沢満之」の名前が出てこないというハプニングがあった。そこで、先生は、多くの来聴者に向かって、「どなたかご存知ありませんか？」と、尋ねられた。話の内容から清沢満之のような気がしたが、すぐに声に出す勇氣はなく、年長の先生方から「鈴木大拙」などの声は上がったが、清沢満之の名は出なかった。たぶん、経済学部の関係者には出口先生の宗教的教養は意外であったのだろう。

さて、私が、出口先生から親しく教えを受けたのは、大学院に進学してからである。大学院の指導教官は、先生の二人目のお弟子さんである田中真晴先生であった。博士課程も後半のころ、出口先生から、平凡社からシリーズで出ているアンソロジー集の一つ

である『世界の思想家21 ウェーバー』の「宗教社会学」を担当しないかというお誘いがあり、田中先生にご相談して参加することになった。もう一人のメンバーは、出口先生の四人目のお弟子さんである甲南大学の山口和男先生であり、出口先生が「学問論」と「社会学」を、山口先生が「歴史研究」と「政治論」を、そして、私が「宗教社会学」を担当することになった。このために、私たちは2～3ヶ月に一度、出口先生のお宅に集まり、それぞれの進行状況を報告し、内容について議論する一方で、個人的にも先生のお宅に伺い、訳出箇所之选択や翻訳に関する指導を得た。このころ、いちばん驚いたのは、山口先生の出口先生に対する最敬礼に近い恭しい態度であり、出口先生の方でもそれを当然とされている様子があった。ここには、かつて田中先生などからお聞きしていた、戦後間もないころの大学院でアリストテレスの『デ・アニマ（魂について）』を読まれたころの出口先生の厳しい態度を想像させるものがあり、その他にもいろいろなことを知る機会があった。当時、コピーは高価なものであったが、この仕事のために人文研の河野健二先生に便宜を図っていただくことになり、それを依頼される出口先生の電話の様子は、まさにお二人が盟友の関係にあることをうかがわせるものであった。また、出口先生の美術に対する愛好とその知識は素人の域を超えていて、美術の話をするときの先生は本当に幸福そうであった。山口先生が年末のお土産に持ってこられた、ご尊父の山口華楊氏の絵画から構成されたカレンダーはこのほか喜ばれた。他にも、O. シュタマーの『ウェーバーと現代社会学』（木鐸社）の翻訳に関わられた筒井清忠氏や出口ゼミの出身者である今村仁司氏らの話が出ることもあった。今ならさしずめ、同じく出口ゼミの大先輩であるアサヒビール元会長の樋口廣太郎氏などの思い出話が出るのかもしれない。

それはともあれ、アンソロジーの仕事は外に出た成果や評価とは裏腹にかなりの難事業であった。ウェーバーの膨大な業績の中から、そのエッセンスを取り出し、その全体像をわずか200ページほどの小さな書物に集約するというのは不可能に近い仕事であり、厳密にやればやるほど消耗感の大きくなる仕事であった。出口先生は、おそらくこのときに初めて、『経済と社会』に取り組まれたのではないかと思うが、遅々として進まぬ仕事にかなりの苛立ちを示された。取り掛かり始めてから、出版まで2年以上を要し、編集者に締切りを延ばしてもらうのは度々であった。

しかし、この過程でいちばん思い出に残っているのは、音楽をめぐる先生との会話である。先生の奥様は、西田幾多郎の高弟である木村素衛の妹さんであるが、当時、ご病

手紙である。先生が東京に行かれてから後、先生からの手紙や年賀状は途絶えた。出口先生のご冥福を心からお祈りしたい。

執筆者紹介 (掲載順)

田 中 秀 夫	京都大学大学院経済学研究科教授
鈴 木 輝 好	京都大学大学院経済学研究科学生
山 下 裕 歩	京都大学大学院経済学研究科学生
大 西 広	京都大学大学院経済学研究科教授
櫻 田 貴 道	京都大学大学院経済学研究科学生
川 勝 健 志	京都大学大学院経済学研究科学生
杉 原 四 郎	関西大学名誉教授・甲南大学名誉教授
岸 田 理	龍谷大学名誉教授
柴 田 周 二	京都光華女子大学人間関係学部教授

会員各位へ 会費は下記にて御納入下さるようお願いいたします。

1. 会費納入先 京都市左京区吉田本町 京都大学経済学部内
京 都 大 学 経 済 学 会
振替口座01090-6-17219番

1. 会費年額 10,000円 (前納)

1. 会員各位の現住所、氏名、卒業年次、就職先を学会まで御通知下さい。

※ 会員外の雑誌購入は有斐閣へお申込み下さい。

平成15年8月25日印刷
平成15年9月1日発行

編集兼
発行人

京 都 大 学 経 済 学 会

印刷所

内 外 印 刷 株 式 有 限 公 司
京都市南区吉祥院池田南町13

発行所

京 都 大 学 経 済 学 会
606-8501 京都市左京区吉田本町
振替口座01090-6-17219番

発売所

株式会社 有 斐 閣
101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
京都支店 606-8225 左京区田中門前町44

CONTENTS

Memorial Address

The Portrait and Brief Biography of the

Late Emeritus Professor Dr. Yuzo Deguchi

A Study of Adam Smith by Shoichiro Shirasugi *Hideo TANAKA*

Financial Engineering and Corporate Finance (2) *Teruyoshi SUZUKI*

On the Labor as the Primary Factor of

Production in 'Marxist Model' *Yuuho YAMASHITA*
Hiroshi OHNISHI

Theoretical Structure of Institutional School

in Organization Theory *Takanori SAKURADA*

The Designs of Environmental Tax System, for the
Conservation of Groundwater Resource (1)

—Case Study of Kumamoto Region— *Takeshi KAWAKATSU*

To the Memory of the Late Emeritus

Shiro SUGIHARA

Professor, Yuzo Deguchi *Osamu KISHIDA*

Shuji SHIBATA

Published

by

KYOTO DAIGAKU KEIZAIGAKU-KAI

(KYOTO UNIVERSITY ECONOMIC SOCIETY)